

# THE TASK の示す

## 芸術に勝る自然の美

園 部 治 夫

### I. 芸術作品としての自然

William Cowper による田園風景の描写は、明快に、又時には暗黙のうちに自然は人間が〈芸術品〉を熟視するために備えられたものであることを力説している。18世紀の多くの詩人のように、Cowper も自然の風景を絵画のように空間的に有機的な形を与えられたものと考えているが、彼はそれが自分自身の行為を知覚している以上によく分っていたようである。

この Cowper による空間的關係を明白に表示した語は、〈ここかしこ〉、〈ここ〉、〈遙か彼方に〉等である。しかしそれは又それを感じ取る者が、意識的に、或いは半意識的に、この自然界にある自然と人間が、純粋な審美的現象と考えられる見地を見出すことの楽しみを明示している。

Thence with what pleasure have we just discern'd  
The distant plough slow moving, and beside  
His lab'ring team, that swearv'd not from the track,  
The sturdy swain deminish'd to a boy!  
*Here* Ouse, slow-winding through a level plain  
Of spacious meads with cattle sprinkled o'er  
Conducts the eye along its sinuous course  
Delighted. *There*, fast rooted in their bank,  
Stand, never overlook'd, our fav'rite elms,  
That screen the herdsman's solitary hut;  
While *far beyond*, and overthwart the stream  
That, as with molten glass, inlays the vale,

THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

The sloping land recedes into the clouds. (1)

あの＜屈強な田舎の若者＞は、明らかに一介の少年に姿が変っているので、それは苦しみ、励んでいる人間と見做すわけにはゆかない。透視画の楽しみはきびしい現実を熟視することを不必要にさせるものである。

Cowper は“The Task”の到る処で、窮乏にあえぐ百姓生活に想像上で参加出来ることを表示している。彼は明らかに義務感からそれをなしているのであり、百姓を熟視する楽しみは、それを子供と考えたり、風景画の人物と考えていることによって得られたのである。同様に広大な牧草地に散在する牧牛は実在の動物ではなくて、作詩上の本質的要素として用いられたものである。＜仕事に励む仲間＞でさえ、＜道からそれない＞という視覚型に加わることを特に強調して描かれている。又ウーズ川にも大きな意味がある。というのは絵画の中にある川のように、その曲りくねった流れに沿って目をやり、見ている者を楽しませてくれるからである。又＜溶解したガラス＞で谷間をくちりばめる＞という水の流れの隠喩はこの詩節に含まれた多くの意味を要約している。目に映ずる自然の喜びは、芸術品に表われた喜びと類似のものである。川を溶解しているガラスの流れに似ているものとみることは、それが規制された審美的総体にあると表明することである。これが特別に意義のある方法に従って方式化された自然であり、観察者の審美的要求に従って、類似を通して了解された自然である。

Cowper のよく描写する状景には、必ずとはいわないまでも、よくこの種の手際よさと、規律正しさとがみられる。というのは“The Sofa”は自然界を殆ど美術鑑定家の見地から画いており、その眼識は森林の相対的な混乱をさえ処理しているからである。

Nor less attractive is the woodland scene,  
Diversified with trees of ev'ry growth,  
Alike, yet various. *Here* the gray smooth trunks  
Of ash, or line, or beech, distinctly shine,  
Within the twilight of their distant shades;

## THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

*There, lost behind a rising ground...* (2)

＜ここかしこ＞の構成を再びとりあげてみると、Cowper は＜森の木で美しい器量を備えていないものは一本もない＞と確信をこめて述べている。そして各個の魅力を鋭い鑑察力で明細に記しており、この詩行の冒頭に暗示されているあの高雅な理想の＜変化に富んだ理法＞の華麗な客観化を提供している。Cowper には、森林と水との間にある丘と谷間のパノラマを＜広大な地図として、その美しさを何ら言外に反対すること＞(3) もせずに気付くことが出来る。人間の業績に関して記述出来るという事実は、その賞賛すべき規律正しさを暗示している。

## II. 自然と芸術との類似性

Cowper の隠喩は、永遠の秩序に対する人間の要求が優位を占める世界を描写している。

＜自然の愛と、自然の画く状景は、自然の命ずるところである＞(4)と Cowper は自然と芸術の間の類似を最も明白に示している詩節の一つで述べている。この類似の目的は芸術より自然の優秀性を強調することであった。即ち

Strange! there should be found, ...  
Who, satisfied with only pencil'd scenes,  
Prefer to the performance of a God  
Th' inferior wonders of an artist's hand!  
Lovely indeed the mimic works of art;  
But Nature's works far lovelier. (5)

と、Cowper は＜自然美の方が遙かに大きい＞ことを指摘して、＜模倣の絵筆は肉眼を楽しませることしか出来ない＞(6) といっており、又、＜人間のどんな作品といえども、これに匹敵するものはない＞ともいっている。しかしこれは表面上正当化しただけであり、それは事実、“The Sofa”の構造と意味の鍵となり、又全体が詩であるということからいえるのである。

芸術より自然の方が審美的に秀れているという Cowper の確信の意義は、

## THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

極めて徐々に現われている。たとい初期における自然の描写には、それは明白に述べられてはいないのであるが、自然の作品の方が、人間の作品以上に立派なものであるということを陳述した直後、Cowperは同じ詩節の中で Thomson や、Akenside に興味を与えた対照の審美原理を探究し始めている。囚人、病人、船乗りは土地を見失ってしまった。然し彼等は、自然によって供された＜饗宴＞を賞味したが(7)、それは絶えず饗宴を受けている者達の及ぶものではなかった。船乗りの場合、自然美を憧れたために、身の破滅を来しててまった。大洋を覗き込んでいると、＜強烈な欲望によってうながされた幻想＞が見える(8)。それは陸地に残した野原の幻想であり、その野原を探し求めているうちに、死に突入してしまう。その死の動因は自然ではなくて想像によるものであった。この幻想の危険は“The Task”では次位に重要な主題となっている。Cowperにとっては、審美的対象としての自然はさほど重要ではなく、黙想の対象として、又人生の与える慰安の源として、自然が重要であるという主題の方が優位を占めており、この点においても、自然は人の手を加えた芸術や技術より卓越しているという。その精神異状が活動しすぎた幻想に起因して心が狂った Kate にしても、又なまけもので、不道德な、しかもそれでもなお＜健康と陽気な気分＞を楽しんでいるジプシーにしても(9)、それは何れも自然との接触による直接の結果となって表われたものである。

Cowper は自然の価値が人間に勝ることを主張している。自然と芸術間の類似性を繰り返して述べ、その都度、芸術は黙想の対象として自然に劣ることを強調し、又自然の審美的価値、＜自然を理解＞せんとする道徳的無害、それを受け入れんとする人間に自然が与える肉体的、精神的健康の重要性等を主張している。人は行動するより、見ていさえすれば心配はない。人生の価値が計られることになっている＜慰安＞が得られるので幸福を感じることが出来る。然しそれとは反対に不吉な暗示のものもある。船乗りは殺され、Kate は幻想活動の結果として発狂してしまう。ジプシーたちは、こそどろを働く。それも自然の力を受け入れた者としては祝福されているが、行為者としては愛敬のある者とはいえない。

### Ⅲ. 都会の文明と田園の文明

田園生活が謳歌されたのは、それが都会の退屈した生活から逃避出来るものを備えていたからである。18世紀になり、有産階級の文化が台頭すると同時に〈都会人〉は〈田舎者〉とか〈無教養〉とかいわれる危険性から免れようとして、都会風をあこがれたのであった。が、同時に恐らく、貴族社会が土地に準拠しているということを潜在的に意識していたので、都会では得られない優雅さを得んがために、故意に都会風を拒否するに到ることさえあった。このように Cowper の “Retirement” にある〈田舎の小屋〉には〈市民〉が登場してくる。それは、彼の人為的な有産階級の都会風は、自然で貴族的な素朴さを必要とする背景には極めて不適當であるというおかしな理由からである。それを Cowper は次のように描いている。

Tight boxes, neatly sash'd and in a blaze  
With all a July sun's collected rays,  
Delight a citizen, who, gasping there,  
Breathes clouds of dust, and calls it country air. (10)

そして典型的有産階級者の態度を約言して、又次のように言っている。

He likes the country, but in truth must own,  
Most likes it, when he studies it in town (11)

Cowper は自分自身の風変りな態度をその詩の核心でふれている。彼が都会を拒否したことは明白であるが、それは自分自身の理由によるものである。そして田園を心から嘆美した。それは田園が真に楽しめる喜びを彼に与えてくれたからである。静寂と平和は永久的ではないにしても、田園の状況の中であって、彼を捕え、同時に自然は彼に自分を慰めてくれる喜びを与えた。彼が純粹な感情を伝達出来たのはこの確信があったからである。

Cowper は〈純化〉によって特徴づけられた都会の〈文明〉と田舎の〈文明〉の区別を主張している。美德は〈暖くて温和な土壌で、培われた生活〉(田舎のこと)(12)で栄えるのであって、下水はあっても、〈どんな土地でもかすやお

## THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

りがいつもあふれている都会>(13)では栄えない。唯一つ都会を賞賛出来るのは<美術の温床>(14)であるということだけである。Cowper は同時代の画家 Joshua Reynolds を——<さえない白紙>を<自然がそれに写った全ての顔だちをみる鮮明な鏡>(15)に変えることが出来る——と称して、彫刻家 John Bacon を始め一般の彫刻の力をほめ称えている。彼は又哲学の業績と商業の業績を嘆賞しているようにも思われる。繁栄している商業の中心地ロンドンと幽囚の古都バビロンを比較しているが、それは自分の表現には明らかに裏面の意味が含まれていることを指摘して言ったつもりである。彼のロンドン罵倒是称賛を遙かに上まわり、しかもその罵倒是、都会活動の弊害や、<文明化した形式>が精神的内容にすっかり変っている不正と偽善の生活に集中されたものである。

Cowper は自然界の審美的考案の価値を主張し、又論証もした。彼は自然の審美的価値、世俗的活動に参加することが危険であるという同様に明白な認識を自分で強要したことに反対している。彼の繰り返して言っていることは、芸術は自然——しかも芸術を正当に認識するための自然——を理解する為には、有用な類似を備えているとは言え、芸術は必然的に自然に劣るものであり、又想像の生活へ傾倒することは危険であるとのめかしている。即ち人間の物を見る知覚、楽しい光景を思い起す記憶力、道徳的危険から守る判断力——これら全ての人間の機能は空想よりも明白に価値のあるものである。“The Sofa”の掉尾を飾る詩人の名句<神は田園を造り、人は都市を造った>(16)こそはこれら全てのことを約言したものといえよう。

Cowper が謳歌したのは、簡素な生活であった。彼は田園生活と田舎人とを称賛した。都会の人工作為を拒否し、都会の文明を嫌悪して生れたのがこの句であるが、その言い回しには、ある種の偏狭がないとはいえないし、又超簡易化されて素朴に過ぎるきらいもないわけではないが、完全な本来の姿の有する力が見られる。この言葉が発せられたのは、そのような情趣がはやっていたからではなく、そうだと思ったからである。英国の詩人でその時代の様式の感化を受けなかった者はないだろう。然し Cowper だけは例外で、殆どその影響を受けていない。むしろ、それ等には無関心だったからである。それは彼が、

THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

「作詩するに際して、私の得た主な利益の一つは、この13年間に一人の英国詩人のものも読んでいないし、20年間で唯一人しか読んでいないことだと思う」(17)と言っているのをみても解る。彼が田園生活を称賛するのは、明らかに話題に取り上げることを知っていた時であって、その幻想をもっていた為ではない。それには冬と悪天候、泥道、冠水の田畑、雪の庭園、しめっぽい居間が含まれていた。

Cowper は又、多くの人が、飢餓賃金、酩酊、空皿、火の気のない暖炉などを話題にしているのを知っていた。そのような社会悪に対して、彼は一般人が望む程、強い関心は示さなかったが、少なくともそれを無視しようとする素振りではなかった。彼は＜自然の子供達＞が日向で遊んだり、いちごを摘むのと同じ程気楽な暮らしをしているような感傷的な絵を見せているのではない。もし彼の画いたジプシーの絵に一種の辛辣さがあるとするなら、それは全く真実といってもよいものである。

I see a column of slow rising smoke  
O'ertop the lofty wood that skirts the wild.  
A vagabond and useless tribe there eat  
Their miserable meal. A kettle, slung  
Between two poles upon stick transverse,  
receives the morsel—flesh obscene of dog,  
Or vermin, or, at best, of cock purloin'd  
From his accustom'd perch. Hard faring race!  
They pick their fuel out of ev'ry hedge.  
Which, kindled with dry leaves, just saved unquench'd  
The spark of life. (18)

Cowper はあらゆる面において、実際に則して物を考える人間であったので、自分を偽って田野を新らしいエデンの園などと考えるようなことは決してしなかった。彼は庵の簡易生活の喜びを語り合っている人に、何らの感動も示さず

THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

に耳を籍している。彼は Lady Hesketh に宛てた手紙で、「一般に詩人が小屋とか、庵とか、或いはそのようなものについて話している時は、それは正面には六個所の窓枠があり、快適な居間二部屋、気のきいた階段と、適度の大きさの三部屋の寝室のことを言っているということを了解しなければならない」(19) といっている。次の詩行でも Cowper が如何に小屋に心引かれていたかが分かる。

・・・perch'd upon the green-hill top, but close  
Environ'd with a ring of branching elms  
That overhang the thatch. (20)

その場所柄や、僻地にあること、その魅力のあることなどから、彼はそれを＜百姓の巢＞と呼び、又その＜平和な隠れ場＞は自分自身のものであればよいと思ったことが幾度あったかわからない。然し現実には長い間目かくしされたままではなかった。

Its elevated site forbids the wretch  
To drink sweet waters of the crystal well;  
He dips his bowl into the weedy ditch,  
And, heavy-laden, brings his bev'rage home,  
Far-fetch'd and little worth; nor seldom waits,  
Dependant on the baker's punctual call,  
To hear his creaking panniers at the door,  
Angry and sad, and his last crust consum'd.  
So farewell every of *the peasant's nest!*  
If solitude make scant the means of life,  
Society for me! (21)

この最後の詩行には、虚飾はみじんもなく、真実にあふれ、読む者をして、Cowper に対する心暖まる思いで充たしてくれる。特に田園生活を無条件で謳歌する彼と同時代のあらゆる詩人達の中で、彼ほどそれを荒い言葉で使いたが



ったということが分った時にはなおさらのことである。

#### IV. 荒野の美しさ

Cowper は Wordsworth が愛したようなやり方では自然を愛さなかったし、自然が彼の想像力を育てあげたので、Keats のようにそれを愛することもしなかった。というのは、彼は自分の夢に画いた土地を、最も快適と思った見解で創造したからである。彼は自然を客観的な人目につかない愛し方で愛した。彼にとっては自然のあらゆる面が美しかったからである。彼の言によれば、ある朝、日の輝く庭園に腰を下して気がついたのは、戸外の耳に入る音で調子の外れたものは、自然界には無いということであった。蜜蜂、犬、鶯鳥でさえことごとく彼は好きだった——多分驢馬は別だったかも知れない。驢馬が嫌いになったというのは、彼が仕事を始めようとした時、すぐ近くに来ていなないたからである。又自然の音と感じたものを、彼は自然の風景と香りであるとも感じた。彼の好んだあの単調な、草深いバッキムシャーの田園は、実際はさほど美しいものではなかった。然しそれは、彼の最も良く知っていた田園であったから、彼はそれを深く愛したのであった。Cowper の自然愛は極めて強烈ではあったが、それは彼の外の感情と同種のもの即ち、一時的な激情というより、むしろ永続的な愛情というようなものであった。彼は自然を、静かに忍耐強く、しかも執拗に、むら気など起さずに、才月を経て強くなり、習慣によって固まり、追想によって清められた力をもって愛した。彼は又自然を幾分控え目ではあるが、最高に愛した。荒野が彼の目に美しく映じない時は唯一瞬間もなかった程である。晴天で微風のある五月の或る朝であった。樹木には若芽がもえ、ねずみ色の柳、銀白色のポプラや、つやつやした楓などが生えており、その下には何れも花の咲いたかんぼくと、きばなふじと曲ったライラックがあり、その根元には、スマレとせいようおにしばりとが咲いている。鳥は歌い、リスは声をあげて走り廻っていた。

冬の荒野にも美しいものがあつた。雪の降った静かな、澄み透るような朝、

## THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

Cowper の影はギラギラ光る白雪の上に、奇怪な程長く傾いて写った。マングースは飛び上ったり、ころんだり、冷たい粉雪に鼻をつっこんだりしている。あたりは余りに静まり返っているので、クリフトン会堂の鐘の音が遠く近く谷間にこだまするのが聞えた。

Cowper は荒野の一語に尽きるような処を歩いて帰って来るのが楽しかった。門をくぐり、泉の前を通り過ぎ、狭い小路を抜けて、たちじゃこう草にくるぶしを埋めながら、古びた橋までやってきた。それから藪にさしかかると、その中に苔むす家がはんの木と並んで見え、やがて崖まできて、ようやく一息入れるために立ち止った。崖とは名のみで、実際はウーズ川の谷間を見下ろすうねであった。彼の目はやがて、にれの木立に囲まれたわらぶき屋根から立ちのぼる一すじの煙をとらえた。この〈百姓の巣〉こそ、いつも彼の想像をとらえた風景であった。彼はそこに、質朴な世捨人となって唯一人、小鳥と、動物と、樹木を友として住んでみたいと空想にかられるのが好きであった。浪漫的想像力なら、よくその気にもなれたのであるが、彼の想像力では、放縦、自己欺瞞には決してなれなかった。それは Cowper 自身の自信の欠乏の健康な側面であるとみてよからう。

又 Norman Nicholson も指摘している通り、「Cowper は Hopkins のように夏の盛りのような、潑刺さのある詩人ではなくて、真冬の静けさ——この世は彼がそれを見守るために静止していた——を好む詩人であった」(22)。そして彼は冬の描写をよく自分の詩に取り入れている。それはこの季節を休息の時期と考え、この季節に神は不思議な形で恩寵を示し給うと考えたからである。然し神の御手は自然の荒野の中では容易に見分けることは出来なかった。それは怒れる神の仕業以上のもののように思われた。然し、この特殊な状景が果してどの程度の限界を彼の詩に与えているだろうか。それは、第一に、絵を画くのに広い画面を必要とはしなかった、彼は半身像のぼかし絵画家であったからである。冬の描写をする時でさえ、制限された寸法の画面を用いた。絵には Cowper の人影、納屋に押しこまれた家畜、雪を頂いた村の教会の塔、などは見えるが、広々として一面雪に覆われた山や、見はるかす荒野などは思いもよ

らない。第二に Cowper は、自然を神に結びつけることにより、大ていの偉大な自然詩人達にみられる、自然現象に対するあの純粋な肉体的喜びである驚異の不信感から解放されるのである。このような事が真の芸術的な限界であるが、それは彼の生来の特異性と宗教的信念から直接生じたものであった。

## V. 芸術を凌ぐ自然の優位性

Cowper は自然が芸術に卓越している点の主要な理由として、自然の魅力の多様性をあげている。画家の技倆は秀れてはいるが、それは肉眼を楽しませるだけである。自然は人間のあらゆる感覚に話しかけてくれる。

The air salubrious of her lofty hills,  
The cheering fragrance of her dewy vales,  
And music of her woods—no works of man  
May rival these. (23)

芸術の劣等性を公言すると同時に、Cowper は同時代のどの詩人にもまして自然の無限に変化に富んだ魅力を示すことに成功している。彼は18世紀の典型的詩人でさえ除いたような特殊な現象を極めて詳細に記述している。これを例示すると、樹木を描写するに当り、それは単に樹木の美の抽象概念ではない。どの木にも名前と特徴の色がある。ポプラは＜その葉に銀の裏をつける＞で、柳は＜やや青ざめた灰色＞で、いちじくは＜時には緑で、時には黄褐色＞で、晩夏は＜真赤な色に輝いた＞衣をつけている。経験に富んだ庭師の場合、利己心のない愛情を以て、色、香、花の形——＜純象牙＞のばいかうつぎ——を詳しく書きとめている。ライラックは＜時には白く、時には血紅色＞又は＜ピラミッド型の紫の穂でちりばめられて＞いる。すいかずらは＜いつまでも飽きない香＞をもっており、えにしだは＜真黄で純金のように輝やかしい＞し、復活祭に使うきばなふじは＜流れる金のように豊富＞である。

What wonder, then, that health and virtue, gifts  
That can alone make sweet the bitter draught

That life holds out to all, should most abound  
And least be threaten'd in the fields and groves. (24)

無抵抗な人間に対して、自然が何ら脅威にならないのは、自然の有する明確な美德と同じ程大きな価値がある。然し究極の価値は審美的なものにもどるのである。Cowper は都会の住人を彼等自身の領域にゆだねている。彼等は<芸術が考案するような景色以外はどんな風景も賞味しない>(25) からである。それで彼は自分にもっと興味を与えてくれる景色——田舎の森、小鳥、日光——に立返った。というのは、その審美的威力が、人間の芸術と技倆によって完成されたものと整然とした対照をなしていることを知ったからである。“The Sofa”は強烈な教訓的な調べとなって終わっている。

Folly such as your's,  
Grac'd with a sword, and worthier of a fan,  
Has made, what enemies could ne'er have done,  
Our arch of empire, steadfast but for you,  
A mutilated structure, soon to fall. (26)

都会生活に対する、この最後の非難は、彼等が小鳥よりもオペラ歌手を選び、月光よりも灯火を選んだことよりも、もっと重大な罪があることには何もふれないでなされている。然し Cowper の倫理説では、このように判断を誤まり、又このように程度の低い考え方を進んで受け入れたので、結局は本物の精神的な失敗となってしまった。彼は自然に対する強力な知覚的反応と精神的直立とが絶えず提携し合うという論拠を未だ充分表明していなかった。

Cowper は自然と芸術に関して、特別な状景をあげて、画家も詩人も自然の真実性の美しさを捕えることは出来ないと主張した。芸術は自然の<鏡>としては明らかに不適當である。たとい鏡にあこがれるとしても、それは当然失敗に終る。Cowper はこの詩の到る処で、芸術家の精神は鏡であるとして、詩人の責任を次のように説明している。

THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

To arrest the fleeting images that fill  
The mirror of the mind, and hold them fast,  
And force them sit till he has pencil'd off  
A faithful likeness of the forms he views. (27)

芸術——特に詩——は、鏡を自然の為に用意するかも知れない。然しそれは審美的意味ではなくて、精神的意味においてである。

Cowper は自分の詩の＜流れ＞を＜たとえ＞の美德ではなくても、その価値を鮮明に反映させるものとして描写している＞(28)。凍てつく風景の驚異を描写し続けながら、Cowper は視覚に映ずる正確な詳細画以上に暗示に全力を注いでいる。＜此所、岩窟の中の岩屋は間違いなく日光を遮っている＞(29)。彼は読者に霜の現われを見ることは勿論のこと、その偉業の意義と神秘性を考えてほしいと求めている。そして Cowper はこの美しい創作において、自然が芸術に勝ることを強調して次のように述べている。

Thus nature works as if to mock at art,  
And in defiance of her rival pow'rs;  
By these fortuitous and random strokes  
Performing such inimitable feats  
As she with all her rules can never reach. (30)

Pope の示した芸術と自然との本質的、必然的調和感は既に消え、Cowper においては、今やこの二つは対立勢力となり、しかも明らかに自然が優位を占めている。芸術に対する自然の審美的優位は次の詩行においても明白に説明されている。

The growing wonder takes a thousand shapes  
Capricious in which fancy seeks in vain  
The likeness of some object seen before. (31)

幻想即ち芸術を生み出す人間の創造力はあらかじめ知覚された対象を新らしく結合したり、解釈したりすることに限定されているので、知覚済みのものには

## THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

全く無関係に新たなものを生み出すことは出来ない。然し芸術家としての自然はこのような制限には左右されていない。即ち自然が創造したものは、既に知覚された対象に類似したものとは全然関係のないものである。唯自然のみが想像が働きかける新らしい材料を提供することが出来るということを Cowper の詩は示唆している。

## VI. 自然の表裏

Cowper は自然を真正直に描写したが、その平穏な面のみを強調して、自然の中にある人間以下のもの、超人間的なものを含めて、あらゆるものが、＜全能の主＞によるものであるとした。そうすることによって、彼は自然の分野から自分に不安を与えたかも知れないあらゆるもの、又、自然の隠されたどん慾をもしめ出してしまった。彼はその閉ざされたよろい戸や、張られたカーテンや気持ちよい暖かさなどのあるあの＜家庭の幸福＞——彼はその魅力を親愛の情をこめて称えている——が得られたのは、自然によるものであるとした。然し自然の不調和音を締め出したことは、却って自分自身の神学的不調和音を閉じこめてしまう結果になった。責任を負わない神の暗い容姿が、自然の中にある基本要素に分解されてしまったり、自然の法則を守り、自然の未開状態のままのものによって混乱してしまった化身となって現われてくるまで、神は人の心をしいたげ、又より真実で、より人間的な概念が現われてくるのをさまたげていた。

このように Cowper は自然の穏やかな局面に注意を集中したことにより、神の残忍性を不滅のものとした。自然は Cowper にとっては精神安定の麻醉薬にすぎなかった。それ故人間が力の闘争と宇宙の知恵と相携えることによって、人間の意志を強力なものとした独創的意図を自然の中に見出すことが、ローマン派の詩人達のつとめとなり、それを彼が責任ある者として和音に解決しなければならなかった。Cowper は自然をその魅力の故に、その優雅の故に、その可愛らしさのために、おもいやりのある、又立派な眼識のある友人として

## THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

愛した。が、彼には自然の抱擁の中に、自分自身を見出したり、見失ったりする熱情に欠けていた。“The Task”の中で Cowper は自然から顔をそむけてしまい、説法したり、超自然の神性の前に平伏したりした。彼がそのように振舞っているうちに、自然の美德は彼から離れてしまった。というのは自然の中に教訓と超自然の秘密があったからである。又自然の中に＜美の徳と不朽の生命＞があったので、その自然の型をとった霊的实在は塑像となってしまった。然し自然の面前では、Cowper は＜独創的人物＞としてではなく、＜敏感な生きもの＞として立っていた。自然は彼の神経の緊張を緩めてはくれたが、神学でゆがめられ、良識に束縛された彼の精神を解放してはくれなかった。やさしい心で、自然の容貌をせんさくするのをやめた時、自然を楽しむのが恐ろしくなったような者に対して、自然はその意図を打ち明けることが出来なかった。

With a propriety that none can feel  
But who, with filial confidence inspired,  
Can lift to heaven an unpresumptuous eye,  
And smiling say “My Father made them all!” (32)

田野や森林にみられる落着けそうにもない静けさは、遂に彼のそううつ症には居間の心地よい暖気同様、効目のない薬であることがわかった。彼をなやましたような神からは、何ら安全な逃避は得られなかった。大胆に神に会いに出かけてゆきさえすれば、その恐怖となっていたものは、迷いから出たものであることが立証されたり、又専制者を鎮圧して親友を見出すことも出来た。然し思慮分別が勝利を取めた後にくる平穩——それは一時的な平穩とは大分異っている——は彼の力では得ようとしても得られなかった。

## VII. 自然と宗教・神

Cowper の宗教観からいえば、人間は自然の一部分であり、又人間は生来悪である故に、自然自体は美ではあり得ないという。然し Cowper に厳密な論理を求めても無駄であろう。それは、自然、人間及び神にまで及ぶ満足な哲学と考えられているものに必要な材料となるものは、18世紀にはまだなかったか

## THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

らである。Cowper が自然に引かれたのは、単に彼の美に対する愛、平和を構成するための必要性からだけではなく、善と内的自由とが、より容易に隆盛を極めることが出来ると思った簡易生活の象徴が、自然の中にあることを知ったからである。彼の直感力は独断の堤防から溢れ出てしまっているが、彼は本質的には、宗教的合理主義者であり、信仰の教義上の制度を必要としたのであった。そのため、彼の自然に対する愛は、彼の奉ずる信仰に忠実に従う息づまるような衝動によって生じたものではない。彼の自然愛こそ、彼を必然的に福音主義の信仰に導いたのであり、そのために救われていない＜自然人＞に対しては、神学的に不賛成の意を示したが、唯当時の宗教の儀式の中で、精神生活を破壊させるような悪に対しては、真向から反対して、その詩の一行一行で、これを非難したのであった。

Cowper の信ずる処によれば、宗教は純粹の幸福の唯一の根源でなければならない。たとい彼が特に宗教的ではないものによって、幸福になったことが分ったとしても、彼はそれを理論的になんとかして宗教に結びつけようとして、それを神の恩寵と見做した。

Unwin 一家の一員として迎えられてからの Cowper にとって楽しい生活は、信仰と愛の協同生活をしているキリスト教徒の集合的統一の原型であった。自然の美しさは全能者が此の世に示し給うた広大無辺の恵みである。Cowper が自分の宗教に関心を示している限り、このように物をみつめていると、その楽しみも強められるのであった。というのは、それが極めて些細な喜びの瞬間を深遠な情緒の満足感で満たしたからである。炉辺に静かな夕べが訪れると、路傍に咲く、くりんざくらは、Cowper に神の不滅の啓示をささやいた。然し彼は自分の楽しみを、宗教に見出すことが出来なくなった時に、自分の幸福をも自然現象の中に見失った。それは、たとい、彼の精神状態が、それに値するようなものではなかったとしても、彼の良心が、自分自身幸福であることを認めないということだけではなかった。彼が何かをして、楽しみを感じることが出来たのは、以前にそのような楽しみは、宗教的歓喜を得た瞬間、必然的に最高潮に達したことを思い出したからであった。処が事實は、もはやそんなことは



THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

なくなったので、彼が感じたような楽しみも消えうせた。Cowper は一つの事業に全資産を投じたような者の違約金まで支払ったのであった。その事業が失敗した時、全財産を失ってしまったのであった。

この世界の美は神の人間に与え給うた特別の賜物である。〈楽しい景色〉の日の〈保養〉は実在の富に勝るものであり、更に自然に対する審美的反応は神との適正な関係によるものである。

Acquaint thyself with God, if thou would'st taste  
His works. Admitted once to his embrace,  
Thou shalt perceive that thou wast blind before:  
Thine eye shall be instructed; and thine heart,  
Made pure, shall relish, with divine delight  
Till thou unfelt, what hands divine have wrought. (33)

人間が自然を支配するという誤った考えを懐くのと対照に、神が自然を治め給うということが分れば、人間が獣と異なることも分り(34)、魂は〈新しい機能〉(35)を得て、何も知らずにおろかにも凝視していると、〈あらゆるものの中で、その時までみのがしていたものを識別する〉(36)ようになる。人が星と親しくしている時、〈輝く天群〉が特別な意味をもっているのは、〈人には見えない状景がはっきり見える〉からである。〈真実の灯火〉は人間に〈自然を読ませる〉ことが出来(37)、又自由自体は、〈昼のように魂は砕け、天よりの閃光をうけて、あらゆる機能に栄えある喜びの火をとす〉(38)。

In that blest moment Nature, throwing wide  
Her veil opaque, discloses, with a smile  
The author of her beauties, who, retir'd  
Behind his own creation, works unseen  
By the impure. (39)

もし神が正しい知覚対象の源であれば、神は又知覚対象の目的でもある。これは“The Taks”の Book V; The Winter Mornring Walk の最後の詞にも示

## THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

されている。自由が創り出す、燃えたつような機能は、人間を究極には神へ導き、黙想の対象として神と自然との間に感じられた潜在的又時として真実の分裂を癒やすものである。

Cowper が自分の「回顧録」に記載しているあの胸を打つ話は有名である。それは彼が海上の日没を瞑想して心が高まり、又静まるのを憶え、同時に、神の力にだけ頼ることの出来る精神治療を、罪と知りつつ自然の力によるものとしたことを知って、彼はそれ以来どんなに罪悪感にさいなまれたことだろう。然しこの Book V の理論では、このような特質は事実上消えている。それは自然と神が一体である——〈自然は、その根源は神であるという効果をねらった一つの名称に過ぎない〉(40) というためではなくて、自然を知覚する能力は、神との正しい関係の結果であり、又自然に対して審美的反応を啓発させる機能を高めることは、如何に神が神自身を自然を通して示されているかを知ることであるからである。自然が備えている風景を知る能力は、このように真実に人の精神状態のテストになっている。芸術より自然が審美的に秀れていると信じることは、単に個人的反応の問題ではなくて、自然には、如何なる芸術作品もなしとげることの出来ない本質的意義があるということを認識する結果である。“The Task” の到る処で、自然描写の最も感銘的な節句がこの意義を明示しようと努めているのがわかる。

### VIII. 神の聖業と自然の美德

Cowper の魂が、敬虔な宗教心の経路によるよりも、むしろ自然を通して直接に神と交わるのが最善であるということは、彼がその霊的交渉を表明した詩の特色によって証明されている。“Olney Hymns” の “Retirement” の中で Cowper は静かな場所をあこがれていることを述べているが、自然は彼にとってはまだ、聖書による罪のあがないの徳のようなものであった。

Far from the world, O Lord, I flee,  
From strife and tumult far;  
From scenes where Satan wages still  
His most successful war.

THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

The calm retreat, the silent shade,  
With prayer and praise agree;  
And seem by thy sweet bounty made  
For those who follow thee. (41)

この詩節は Cowper の書いた全てのさんびかの中で、神が自然を通して呼び求められている清純な詩に最も接近したものであるということがわかる。しかもこの詩においてさえ、感情は慣用的語法にある程度の個人的な意味を充分誠実に満たしている。

Cowper は＜神の聖なる言葉＞からよりも、自然からより多くの美德を得ることが出来たが、唯自然と知性に同様に忠実であることだけで、人間はその人間性と、その神学の両方を理解出来るかも知れないということは、彼には決して解らなかった。“Charity”においても、彼は次のように述べている。

Nature imprints upon whate'er we see  
That has a heart and life in it, “Be free!” (42)

又 “Retirement” では、彼の存在を活気づけた新らしい美德が更に明らかに画かれている。事実この詩は、ある程度まで、“The Task”の序文ともなり、それは又彼が探求することにしていた自然と交る人生術の最初の下書きともいうべきものである。＜おお自然よ！＞と呼びかけ、

whose Elysian scenes disclose  
His bright perfections, at whose word they rose,  
Next to that power, who formed thee and sustains.  
Be thou the great inspirer of my strains.  
Still, as I touch the lyre, do thou expand  
Thy genuine charms, and guide an artless hand, … (43)

正統的信仰による神は、なお彼と自然の間に立っており、彼は自然をいまだに＜神の広大な計画図＞とみなして、人を諭している。

who studies nature with a wanton eye,  
Admires the work, but slips the lesson by. (44)

THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

従って彼の語法の多くは形式的なものであった。

Pastoral images and still retreats,  
Umbrageous walks and solitary seats,  
Sweet birds in concert with harmonious streams,  
Soft airs, nocturnal vigils, and day dreams, ... (45)

もしも自然の流れが、唯、「詩の調べに合せて美しく響くだけ」であるなら、自然のためにのみ自然を呼び始めたに違いない。それは自然の中に神学の確証を求めるだけでなく、自分自身の生活を強化させる生活原理を求めるためである。Cowper は要するに道德家ではなくて、詩人になり始めていたのであった。

実際の処、自然は決して Cowper の神学的妄想を癒す役目を果すことは出来なかった。というのは、たとい、特称によって自分自身を自然と提携させることは出来たにしても、宇宙の秘密は自然を支えていることでもあるということと、その待望していた生命の源との究極の交わりが達成されるようになったのは、彼に知性があったため拒否した信仰に従うのではなくて、彼自身の言葉に従えば、「劣等なるものから神にまでのぼる」生命、即ち人間の機能が完全に調和しているので、神になれる生命を、聰明に表現したからであるということが、彼には決して了解出来なかったのである。

彼にとって現象界の神は、常に人間と自然の生命の仲裁をするためのものであった。しかもそれを自分の身につけるのが彼の目標でなければならなかった。

Man in a harp, whose chords elude the sight,  
Each yielding harmony, disposed aright;  
The screws reversed (a task, which if he please,  
God in a moment executes with ease),  
Ten thousand thousand strings at once go loose,  
Lost, till he tune them, all their power and use.  
Then neither heathy wilds, nor scenes as fair  
As ever recompensed the peasant's care,

THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

Not soft declivities with tufted hills,  
Nor view of waters turning busy mills,  
Parks in which Art preceptrees Nature weds,  
Nor gardens interspersed with flowery beds,  
Nor gales that catch the scent of blooming groves,  
And waft it to the mourners as he roves,  
Can call up life into his faded eye,  
That passes all he sees unheeded by. (46)

実際、これは＜読んでいて可哀そうになる状景＞で、同情して悲しんでも無駄なものであった。というのは、もはや Cowper の力では、職人の神から逃れることは出来なかったからである。というのは、その神から彼の存在のねじをたち所に、しかもやすやすと逆転させてしまったし、又その神に彼は自分の運命を極めて控え目に任せてしまったからである。然したとい Cowper が神学に対する不変の恐怖から逃れることが出来なかったとしても、自然の親しみ易い美しさの中では、その恐怖も、少くとも瞬間的ではあるが、忘れることが出来たのであろう。そして数年間、福音主義の信仰に何らの共鳴をも示さなかった者に刺激されて、それまで殆どなかったのであるが、そのような忘却の中で幸福感に浸ることになったのである。

註

- (1) The Task, Book I, The Sofa, ll. 158—171. (引用文中のイタリック体の語は全て筆者によりなおされたもの)
- (2) Ibid., ll. 300—305.
- (3) Ibid., ll. 321.
- (4) Ibid., ll. 412—413.
- (5) Ibid., ll. 413—421.
- (6) Ibid., l. 427.
- (7) Ibid., l. 433.
- (8) Ibid., l. 451.
- (9) Ibid., l. 587.
- (10) Retirement, ll. 483—486.

THE TASK の示す芸術に勝る自然の美

- (11) Ibid., ll. 573—574.
- (12) The Sofa., ll. 678—679.
- (13) Ibid., l. 683.
- (14) Ibid., l. 693.
- (15) Ibid., ll. 700—702.
- (16) Ibid., l. 749.
- (17) Letter to the Rev. William Unwin, Nov. 24, 1781.
- (18) The Sofa, ll. 557—567.
- (19) Letter to Lady Hesketh, Nov. 26, 1786.
- (20) The Sofa, ll. 222—224.
- (21) Ibid., ll. 239—252.
- (22) Norman Nicholson : William Cowper (London, 1951), P. 124.
- (23) The Sofa, ll. 428—431.
- (24) Ibid., ll. 750—773.
- (25) Ibid., ll. 756—757.
- (26) Ibid., ll. 770—774.
- (27) The Task, Book II, The Time-Piece, ll. 290—293.
- (28) The Tasks, Book VI, The Winter Walk at Noon, ll. 723—724.
- (29) The Task Book V, The Winter Mornng Walk, ll. 117—118.
- (30) Ibid., ll. 122—126.
- (31) Ibid., ll. 119—121.
- (32) Ibid., ll. 745—747.
- (33) Ibid., ll. 779—784.
- (34) Ibid., ll. 785—790.
- (35) Ibid., l. 806.
- (36) Ibid., ll. 808—809.
- (37) Ibid., l. 845.
- (38) Ibid., ll. 883—885.
- (39) Ibid., ll. 891—895.
- (40) The Winter Walk at Noon, ll. 223—224.
- (41) Olney Hymns; XLVII, Retirement の第1節と第2節。
- (42) Charity, ll. 169—170.
- (43) Retirement, ll. 198—204.
- (44) Ibid., ll. 213—214.
- (45) Ibid., ll. 256—260.
- (46) Ibid., ll. 325—340.